

## 専門家からの意見について

令和2年8月27日（木）、日本海新聞「読者の広場」に、海とくらしの史料館の活用についての投稿が掲載された。このことを受けて、投稿者の清末氏を訪問し当館の今後のあり方について意見を伺った。

（清末氏について）

鳥取大学学芸学部を卒業し、小学校教諭に。東京教育大学理学部に内地留学し、植物分類学を専攻。鳥取県立博物館学芸員などの経歴がある。現在は鳥取生物友の会会長や鳥取自然に親しむ会会長などを務める。海とくらしの史料館に貝類のコレクションを寄贈。その他文化振興に関してさまざまな受賞歴あり。

【日 時】 令和2年10月8日（木）午後1時～午後2時

【場 所】 清末氏宅（鳥取市元町）

【出席者】 清末 忠人氏

生涯学習課（竹内係長、門脇）

### 展示について

- ・大切なのは「学び」を見せる展示にすること。現在の理科の教科書には、魚類について学ぶ部分がほとんどない。「わかった」という感動や驚きによって初めて学びが生まれる。
- ・魚のより細かい姿がじっくり観察できるというはく製の良さと、実際にはく製の魚の生きている姿を見られるという映像の良さが合わされば、より深い学びを得られる施設になる。
- ・ただあるものを展示しているというだけでは学びを得ることはできない。展示の内容を変えられるよう、バックヤードは重要。

### にぎわい作りについて

- ・学びは「点」で終わるのではなく、線から面へ広げていかなければならない。例えば「展示の中から〇〇色の魚を探そう」という活動を行った後に「なぜこんな色をしているのだろう」と子どもたちに投げかける。その後図鑑等を出して調べさせると、生息地に共通点があることがわかる。「では別のこんな所に住んでいる魚はどんな色や形をしているだろう」とさらに広げることができる。
- ・以前夢みなとタワーで魚拓づくりを行ったことがある。自分で釣った魚を使って制作した子どもたちはよりいきいきと活動を行っていた。実際の魚に触れる・見ることのできる活動も必要。

#### 他機関との連携について

- ・現在も高校と連携をしてタッチプールなどを行っているようだが、大切なのは「遊び」で完結しないことである。ヒトデを触ったということだけでも貴重な経験だが、「このヒトデを食べる魚がいるよ」「ヒトデって硬いよね、どうやって食べるだろう」「どんな歯をしているのかな」とつなげることで、学びや史料館内の展示も活用することができる。
- ・学校との連携も必要である。「いつでも行ける」という意識がある故に地元の子どもは来ない。自分は別の活動の際、校長会に赴いて校長先生方に説明し、協力依頼をしたこともある。学校のカリキュラムとして入れるということも、子どもたちの来るきっかけになる。子どもが「学校でこんな所に行った」「また行きたい」という話を家庭ですること、家族でのリピーターが期待できる。

#### その他

- ・上記のようにいくつか展示を利用した活動例を挙げたが、これらを行うには魚に対する知識・技術や子どもにはたらきかける指導力のある人材が必要不可欠である。今後史料館をより活用していくためには人材の養成も視野に入れるべき。